

## 「里づくり通信」2022年10月

### ■10月19日(水)～20日(木)に現地研修(道央・道南ブロック)を開催しました。

今年度は八雲町で研修を行いました。下記のとおり、概要をまとめましたのでご覧ください。

#### 1 八雲町の町づくりの取組(NPO 法人やくも元気村 赤井義大氏)

場所:八雲町活性化施設 ファームメイド遊楽部1号館

- ・中学卒業後、高校はニュージーランドへ、大学はカナダの大学へ通っていた。その後日本に戻り、東京で約2年会社員をした。東京で生活する中で、田舎が好きだという思いと自然が多く人混みがあまりない所を活動の拠点にしたいと考え、Uターンして八雲に帰ってきた。
- ・現在行っている事業は横のつながりがあり、これらと一緒にやるからこその価値が提供できると考えている。NPO 法人やくも元気村の事務局長や木蓮というまちづくり会社の役員、他にも個人事業主としても活動するなど、複数の組織に入り色々な事業を行い、それらを連携させている。
- ・「人材紹介事業」。1番最初に始めた事業。人材不足の田舎と都会で活気無く働いている人たちを上手くマッチングできないかと考えて始めた。農業や漁業の繁忙期を中心に募集を行った。
- ・「体験型観光事業」。何をやるにも知名度がなければ八雲町が選択肢に上がらないと考えて始めた事業。情報発信のために体験型観光に取り組んだ。ゲストハウス SENTO を拠点とし、八雲の自然・文化・歴史・一次産業を体験できるコンテンツを作り上げた。
- ・「廃校活用事業」。廃校を改修し、キャンプ場とした。他にも仕事ができる場所や、音楽室で音楽活動をするなどレンタルスペースとしても使用可能。改修は主に SNS で募集し、全国から集まったボランティアによって行われた。今後は企業等に向けて合宿所として利用してもらいたいと考えている。
- ・「移住促進事業」。人材募集を行った際、ただ募集して仕事があるという条件では人は来てくれず、来ても定住しないと痛感したことから始まった。いきなり完全移住ではなく、「観光以上、移住未満」のライトな移住を増やしていくのが良いと考え、長期滞在できるシェアハウスを二棟運営しているほか、八雲町からの委託を受け、地域おこし協力隊の募集・採用を行っている。
- ・「広域連携事業」。観光を八雲単体で行うには限界があり、道南エリア全体で連携して行うことでより高い効果が得られると考えて始まった。令和3年には函館で「道南どーなん祭」を開催した。そこで出会ったメンバーでLINE グループを作り、「道南サミット」という組織に発展している。今後も小さなプロジェクトを増やしていき、お金も回るような組織にしていきたい。
- ・「教育事業」。外から人材を入れるだけでなく、地域の人材を育てなければ限界があると感じて始めた事業。「やくもの寺子屋」という名前の放課後教室を SENTO で行っている。子どもたちが地方にいながらも世界と繋がったり、将来の選択肢を広げられるような体験を提供できれば良いと考えている。他にも学生インターンの受け入れも実施している。
- ・「農福連携事業」。季節労働のサポート、薬草などの自社栽培、商品開発などを行っている。やくも元気村では野菜のサブスクサービスや直売を行っており、自分たちで栽培した野菜の出口を持っているのが強みとなっている。商品開発ではサツマイモを素材として、干し芋を開発して販売している。
- ・漁業とも連携を行っており、オフシーズンに網を事業所に持ってきてもらい修繕作業を行っている。この形態

は事業所で作業できるため、人材が分散せず、スタッフ不足にならずに済む。これは八雲だけでなく、福祉を行っている他の地域でも実践出来る事例だと考えている。

- ・農泊事業とも連携することで、民間では利益が出づらい観光を上手く回していく役割を担っている。
- ・「農泊事業」。2018年に農山漁村振興交付金を利用してスタートした。はじめに築100年以上の元銭湯をリノベーションし、カフェ兼ゲストハウス SENTO としてオープンした。SENTO は交流の拠点として使って欲しいと考えている。旅人と旅人、旅人と地元の人が交流できるような場所になったらと考え、色々なイベントを行っている。実際に旅で訪れたドイツ人が八雲町を気に入ってくれ、SENTO に1か月2か月滞在していった中で、地元酪農家さんの娘と付き合い、最終的には結婚し、完全移住した。
- ・八雲は観光地ではなく、通過される町だったため、体験コンテンツが必要と感じていた。そこで地域の豊かな自然と一次産業を活かして、農業・漁業体験や木彫りの熊体験などのコンテンツを作った。
- ・当初は外国人をターゲットとし、人を集めていたが、コロナの影響を受けてしまったため日本人も受け入れるようにシフトした。その結果、教育旅行の受け入れに力を入れていった。
- ・本州の修学旅行を受け入れて地元の農家・漁師の家に泊めている。4~10人くらいのグループで各農家・漁師の家に分かれ、1~2泊、完全に農家・漁師の生活スタイルに合わせた体験をしてもらうという内容。これが大変好評だったがこれもコロナの影響でできなくなってしまった。復活できるようになればまた取り組みたいと考えている。
- ・農業体験や漁業体験は低単価では継続が非常に難しい。外国人はそこに価値を見出して高い単価を払ってくれることが多いのでメインターゲットにしていた。近年は日本人も地方に魅力を感じ、高いお金を払ってくれる人が増えてきている印象があるので、今後はこちらもターゲットにしていきたい。
- ・日本人に向けてはワーケーションという形で呼び込みたいと考え、観光庁からワーケーションの商品作りに関する助成金を受けている。SENTO にWi-Fiを整備するなど、仕事ができる環境を整えている。
- ・今後の展望について。色々な事業が連携するからこそその可能性が見えてきているので、それぞれの質を上げつつ新しい事業を展開していきたい。逆にこれは違ったと思うものを辞めるという判断も必要になるので、その見極めをしっかりとやっていく。
- ・これらは1人では出来ないことなので、現在の活動を継続しつつ、仲間作りを行い、色々な人と連携しつつ今後も取り組んでいく。



## 2 北海道八雲町研修牧場プロジェクト 道南発の研修牧場に向けた取組

(株式会社青年舎 吉田邦夫氏)

場所:八雲町活性化施設 ファームメイド遊楽部 1号館

- ・元八雲町副町長。農業に詳しいわけではない。青年舎は町の第三セクターで、立ち上げに関わっていたため、現在社長を務めている。
- ・八雲町では農業の担い手の高齢化と農家数の減少が課題となっていた。平成 28 年に町長主導で大規模な対策を検討し、「新規就農希望者の研修機能と生乳の生産の拡大を両立させた牧場をつくり、八雲町において地域振興や農業振興を目指すこと」を目的として研修牧場の整備が決定した。
- ・令和元年6月に農地所有適格化法人である株式会社青年舎を設立。牧場の名前は「大関牧場」とした。当初の資本金は町・農協・地元農家から出資した。増資などをして、現在は町・農協・まちづくり会社・不二家が株を持っており、個人の株主はいなくなった。
- ・会社設立当初の目標は「搾乳ロボットを導入して絞るとのこと、餌の生産はコントラクターに外部委託をして分業を図る」とし、搾乳及び研修に特化した労働負担の軽減、規模の拡大を目指した。
- ・現在、自社牛が 840 頭、うち 590 頭の経産牛を最新のロボット 8 台の平行パーラーで搾乳する。最終出荷目標を年間 6,500トンとし、1日1頭あたり 36kg 程度絞ることが出来れば達成できる計算。
- ・牧場設立にかかった事業費は 31 億 2400 万円。国からの補助金が 13 億 2000 万円、町が 21 億円を出している。ふるさと納税の追い風による部分が大きく、特殊な事業である。
- ・循環型で色々なことを実施したいと考えており、バイオガスプラントを設置している。家畜糞尿と敷き藁を混ぜたものから出るメタンガスで発電し、年間 700 世帯分を発電できる予定。ガスを取り終わったものを絞ることで、固体は最終的におがくずとして再利用、液体は肥料として利用できる。
- ・搾乳ロボットが 8 台、餌寄せロボットや仔牛に哺乳をするロボットを導入している。社員は牧場だけで 19 人。労働時間は朝の 5 時半から夕方 5 時半まで、3 時間の休憩を含み、1日9時間労働。休みは4週6休で1回は必ず連休としている。労働条件は良いと考えている。
- ・八雲町では不二家のペコちゃんのモデルが八雲町女の子だったという噂から、町長が不二家を訪問し、繋がりが作られた。現在では八雲町と不二家が連携協定を結んでおり、八雲町限定版のミルクィーやカントリーマアムを販売しているほか、ふるさと納税の返礼品にもなっている。



### 3 大関牧場(株式会社青年舎)見学

場所: 大関牧場(北海道二海郡八雲町上八雲 390 番地1)

・株式会社青年舎の大関牧場の見学を行った。



#### 4 コロナ禍での活動について(田中いずみ指導員)

場所:八雲町活性化施設 ファームメイド遊楽部 1号館

- ・七飯町で平成 28~30 年度でふる水を活用し「ななえの食を考える会」として食育活動を行った。現在はそれに加え、木育マイスターの事務局や個人事業主として「きたのめぐみ舎」を動かしている。
- ・「ななえの食を考える会」のふる水事業が終わってからは、食育活動と伝統食を守りたいという考えから、「なないろ七飯」を会場として大人の料理教室を行った。道事業の終了後、食育活動を行うには参加費だけでは活動の継続が難しかったため、キューピーから食育の助成金を受けて活動した。
- ・助成金はもらったもののコロナ禍になってしまい、計画通りにいかず苦しい時期となった。「こども食育アカデミー」という産地見学をし、そこで収穫し、調理して食べるということを計画していたが、出来なくなってしまった。
- ・コロナ禍でも出来ることを考え、子どもの親に七飯の食材と提案レシピを持ち帰ってもらい、子どもが料理する。その動画か写真を送ってもらうという方法で「こども食育アカデミー」を実施した。食材をもらい、そこから発想する子どもたちの料理が良かったようで、大人子ども共に好評だった。
- ・21年から助成金の方向性が変わり、助成金が無くなった。助成金がなくても実施できることとして、レシピが合っているか分からなかったコウレンの作り方をえさし美土里の会から習い、今度は自分達が講師となり、一般の人に教えるということを行った。
- ・昨年度の活動としては、講演会や映画の上映会を行った。また、活動当初から行っている子どもの伝統食と料理教室では鮭のいずし作りやみそ作りに挑戦してもらったほか、受け継ぎたい北海道の食 動画コンテストで入賞もしている。
- ・今年度はおさかな料理教室や果樹園での親子で収穫体験を実施。地元の食材を使い、ごはんにリンゴを混ぜ、カレーにもリンゴを混ぜ、デザートもリンゴケーキという取組も実施した。
- ・木育マイスターとしての取組も年に3、4回実施しており、ななえ大沼学びの森として、森の散策や炭づくり見学などの活動も行っている。
- ・自分が個人事業主となり、地域の食材を商品化することを目的として昨年「きたのめぐみ舎」を立ち上げた。食品衛生上の法律の関係で加工販売が難しくなり余ってしまった梅をジャムにしてもらえませんかという話が地元農家からあったことから、梅ジャムの加工を行った。
- ・自分1人ではなく1人時給を払って一緒にジャムづくりをする人を雇いながらジャムを作っている。梅の他にも桃のジャム、イチゴのジャムの加工も行っている。地元から出てくる声をきちんと聞いて、お互い利益がある形で活動していきたいと考えている。



■ ■ ■ お知らせ ■ ■ ■

研修予定について、お知らせします。

現地研修(道南)	八雲町で開催。
地域づくり研修会	2月28日(火)
指導員会	3月1日(水)
振興局・ブロック別会議(道央)	オンライン開催。
振興局・ブロック別会議(道南)	道南現地研修と併せて実施
振興局・ブロック別会議(道北)	南富良野町で開催。
振興局・ブロック別会議(道東)	鶴居村で開催。

毎月発行の「里づくり通信」では、**皆様からの記事の提供を随時お待ちしております！**

「指導員同士でこんな情報を共有したい」、「活動について、知ってもらいたい」など情報発信に御利用ください！また、コロナウイルス対策で注目された新しいコミュニケーションツールを使った Web セミナーや Zoom ミーティングなどの呼びかけも大丈夫です。関心の高いテーマに絞った実施が可能です。何かありましたらお気軽にメール・FAX・電話等で御連絡ください。

連絡先（担当：上杉）

メール：uesugi.takahiro@pref.hokkaido.lg.jp

F A X：011-232-0027

電 話：（代表）011-231-4111（内線）27-877